

---

# 異世界の

するめ315

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の

### 【Nコード】

N7967V

### 【作者名】

するめ315

### 【あらすじ】

ある朝、目覚めたら異世界でした。未知なる体験にわくわくします。還る方法は、おいおい考える予定。あくまで、予定。予定は未定の、小町勇姫16歳の異世界での生活は……。

「異世界の シリーズ」連載版です。

## 異世界の朝

「つまりお前は、ここがどこだかも、どうしてここにいるかもわからないと……。」

「はい。そうなんです。」

「……はあ……もういい。頭が痛くなる。」

すがすがしい朝の光を浴びながら、人が4、5人寝られそうな広いベッドの上で、シーツ一枚まいただけの姿で、類をみないほどの美青年に事情聴取されている私、小町勇姫<sup>こまちゆうぎ</sup>16歳。ピッチピチの女子高生である。

なぜこんな事態になったかというと。

\*\*\*

「……い……。おき……。おい、おきろ。」

「……うん……。お兄ちゃん……。後5分……。」

「私は、お前の兄ではない。起きろ。これ以上待たせるようならたたき切る。」

「え……!!」

飛び起きた私が見たものは、鮮やかなブロンドのロングヘアと、エメラルドグリーンの瞳をもった絶世の美人だった。

「……やっと起きたか。」

「……おはようございます。つかぬことをお聞きますが、男性の方ですよ。」

「……男以外の何に見えると……。」

「ですよ。ね。あーよかった。で、ここどこですか。」

美人改め、美青年の後ろに見えるのは、私の家が丸々入りそうなほど広く、豪華な部屋。

ベッドの上で私は裸だが、とくに気にしない。私は基本寝るときは裸族だから。このでっかいベッドにかけてあるでっかいシーツを引っ張って身体にまいとけば問題ない。

それよりも、私の記憶が正しければ、昨日は自分の部屋のベッドに入って寝たはず……。なぜこんなところに。

「……ここはセーラ国王の寝室だ。それより、私の質問に答えろ。答え次第では命はないと思え。この部屋に、ましてベッドの中などどうやって入った。その格好を見る限り、大臣や貴族から私を誘惑するために送られてきたか。それとも、他国からの暗殺者か。」

「命のために答えますが、この部屋にどうやって入ったかはわかりません。起こされたらここでした。この格好は、誘惑や気を緩ませるためのものではなく、ただの趣味です。私、寝るときは基本裸なんです。」

「……どうやって入ったかわからないだと。嘘を言うな。お前、どこから来た。」

「生まれも育ちも日本国の首都東京です。」

「……ニッポン……知らない国名だ。どこにある国だ。」

「東の方にある小さな島国です。最近私が注目してる主な産業は漫画やアニメです。あと、中小企業である町工場の技術力は世界一だと思ってます。」

「アニメ？マンガ？それに、東にある島国……。東には確かに島国があるが、ニッポンとかいう名ではなく、穂澄国ほすみこくという国だぞ。隣国のセレナーデ国が貿易をしているはず、確か……主な産業は医療だったと記憶しているが……。」

「……このセーラ国は、何大陸にある国なんでしょうか……。」

「……大陸の名も知らないのか……ここは世界で最も大きいマヌー大陸にある3カ国の一つだ。」

「……あのう……私……もしかしたら……異世界ってやつからきたのかもしれないです……。」

美青年の驚きの顔を見ながら、告げた。最後の方は聞きとるのがやつとのくらい小さな声になっていた。

「い……異世界だと……。」

「はい。」

「そ……そんなの信じられるか。」

「でも、だって……この大陸の名前も国の名前も、私の全く知らないものです……。」

「……か……還り方は……。」

「わかるわけじゃないですか。起きたらここにいたんですよ。」

「だよな……。」

「はい。」

「つまりお前は、ここがどこだかも、どうしてここにいかもわからないと……。」

「はい。そうなんです。」

「……はあ……もういい。頭が痛くなる。」

目の前の美青年は頭を抱えてしまった。赤の他人がこんなにパニックになっているところで悪いが、実は私、かなり異世界に興味しんしんである。

異世界トリップという小説や映画、漫画でしかないようなことを、直に体験しているのだから当たり前だ。

還る方法は異世界を楽しんでから探しても遅くないはず。いや、楽しみながら探すという手もある。

家族や友達には心配をかけるかもしれないが、還ったら頭を下げて謝ろう。

今はこの、未知なる体験を満喫したい。

「……い。……おい。」

「はい。」

知らないうちに自分の世界に入っていたらしい。目の前の美青年が復活していた。

「お前……不安ではないのか。」

「まあ……不安といえば不安ですけど、今はこの未知の体験を満喫し尽くしたいです。還る方法はおいおい考えます。」

「ほう……。」

美青年の目があやしくひかり、得も言われぬ不気味な笑みを浮かべた。

なんだかやばい感じの雰囲気である。

しかし、次の瞬間には元通り。気のせいだったかな……。

「お前、名はなんという。」

「……名を聞くなり自分から名の名。これはどこの世界でも常識だと思っていましたか……。」

「……バッシュ・レオン・ハルベルト＝セーラだ。だいたい分かっていると思うが、この国の王だ。年は24になる。」

「小町勇姫16歳。女子高生やってます。勇姫って読んでください。」

「……女子高生と言うのはなんだ。」

「高等教育を受けている女子のことを、私の国ではそう呼ぶのですよ。おじさんたちの注目の的です。」

「……なんだか気持ち悪いな……。」

「仕方ありません。おじさんたちも日ごろのストレスがあるのですよ。」

「………そうか。……そろそろ話を戻してもいいか。」

「はい。どうぞ。」

「お前……いや、勇姫。この世界に興味があるといっていたな。しばらくこの世界に滞在するつもりであろう。」

「はい。」

「ならばここに住むとよい。」

「ここって、この部屋のことですか。」

「いや、この城のことだ。別にこの部屋でも構わないが……。まだ婚礼の儀をしてないしな。」

「最後の方聞き取れませんでした。なんですか。」

「なんでもない。関係のないことだ。」

「そうですか……。でも、いいのですか。私を住ませても。」

「構わん。部屋は余っている。私の隣の部屋を用意させよう。それに教師もつけてやる。」

「教師？」

「この国の読み書きや常識を知っておいた方よいであろう。話は通じるようだから問題ないな。」

「わー、ありがとうございます王様。」

「いや、せいぜい励めよ。それと私のことは王様ではなく、バツシユと呼んでくれ。それと敬語も無しだ。」

「はい。あ、間違えた。うん。本当にありがとうバツシユ。」

\*\*\*

その時の私は知る由もなかった。

勉強の内容がお妃さま教育だなんて、知らないうちに貴族の養子に入れられてるなんて、お城の外にはバツシユがいないと一歩も出してもらえないなんて、本当に知る由もなかった。

3年後、還る方法もわからないまま、バツシュによく似た面ざしの皇子を腕にかかえることになるのは別のお話。



## 異世界の人間

この抱き枕あたたかくて、抱き心地がいいな。肌触りも好みだ。贅沢をいうならもう少しボリユームというか、肉つきというか……その辺を増やしてほしい。

まあ、好みの量となるとなかなか微調整は難しいな。

しかし、昨夜寝るときに抱き枕なんてあっただろうか。執事あたりが用意してくれたものに、疲れていて気付くことができなかったのだろうか。

「……うん……うん……。」

うるさい。唸るな。まだ寝る時間なんだ。私の安眠を邪魔するな。

そこで、ふと思った。普通の抱き枕は唸るだろうか。

ガバッ

暗殺者かもしれないと飛び起きた。

枕もとの剣を握りベッドの隣を見た。

ベッドには、肩より少し長めの黒い髪をもったかわいらしい少女が裸で寝ていた。

なかなかのスタイルである。

華奢で思わす触りたくなるような肩のライン。顔に似合わないボリユームの胸。胸をより強調するような細い腰。丁度いい肉つきをした足。滑らかな象牙色の肌。

すべてが私好みでむしろぶりつきたくなるような少女……いや、女だった。

私のベッドの中にいるということは、大臣や貴族からの貢物だろうか。

それとも、他国からの暗殺者か。

しかし、どれも違う気がする。大臣や貴族から命をうけてやってきているなら、私を起こし誘惑しないのはおかしい。暗殺者に至ってはターゲットの隣で寝るわけがない。見たところ武器も持っていないようだし、何より、私が人の気配で目覚めなかったのが……。

普段の私であれば眠りは浅く、人の気配に敏感だ。今まで起きなかったことはない。

そして何より、この少女を抱いているとき私はリラックスし、熟睡していた。

不可解な存在である。

それにしても、視界的意味で刺激が強すぎる。集中できず、考えがまとまらない。

しばらく忙しく、女を抱いていなかったせいだろうか。

それとも、この少女のせい。

バサ

シーツプラス上掛けを少女の身体にかけた。

視界的に遮ることもでき、深呼吸をし、落ち着いた。

とりあえずは、この不可解な存在を起こし、本人から情報をとるのが、一番手っとり早そうだ。

「おい、お前、起きろ。おい、起きろ。」

「……うゝん……。お兄ちゃん……後5分……。」

完全に寝ぼけてやがる。

「私は、お前の兄ではない。起きろ。これ以上待たせるようならたたき切る。」

「え!!!!」

飛び起きた少女の瞳の色は黒。この大陸には珍しい色の持ち主だ。やはり、他国からの暗殺者なのだろうか。

「……やっと起きたか。」

少女はこちらをジッと見ている。何か企てている最中なのだろうか。

「……おはようございます。つかぬことをお聞きしますが、男性の方ですよね。」

その質問に出端を挫かれた。

「……男以外の何に見えると……。」

「ですよね。あーよかった。で、ここどこですか。」

この場所が分からないだと。おかしい。無理矢理部屋に入れられたのか？

不信に思いながらも質問に答えてやった。

「……ここはセーラ国王の寝室だ。それより、私の質問に答える。答え次第では命はないと思え。この部屋に、ましてベッドの中など

どうやって入った。その格好を見る限り、大臣や貴族から私を誘惑するために送られてきたか。それとも、他国からの暗殺者か。」

いくら考えても答えは見つからない。直接聞いた方が早いだろう。何か尻尾を出すかもしれない。

「命のために答えますが、この部屋にどうやって入ったかはわかりません。起こされたらここでした。この格好は、誘惑や気を緩ませるためのものではなく、ただの趣味です。私、寝るときは基本裸なんです。」

裸で寝る派なのか……大胆だな……。そんな場違いなことを思いながらも事情聴取を続けていく。

「……どうやって入ったかわからないだと。嘘を言うな。お前、どこから来た。」

「生まれも育ちも日本国の首都東京です。」

「……ニッポン……知らない国名だ。どこにある国だ。」

「東の方にある小さな島国です。最近私が注目してる主な産業は漫画やアニメです。あと、中小企業である町工場の技術力は世界一だと思ってます。」

「アニメ？マンガ？それに、東にある島国……。東には確かに島国があるが、ニッポンとかいう名ではなく、穂澄<sup>ほすみ</sup>国という国だぞ。隣国のセレナーデ国が貿易をしているはず、確か…主な産業は医療だったと記憶しているが……。」

なんだかこいつの言っていることがおかしい。頭がいかれてるのだろうか？

「……このセーラ国は、何大陸にある国なんでしょうか……。」

「……大陸の名も知らないのか……ここは世界で最も大きいマヌー大陸にある3カ国の一つだ。」

大陸の名も知らないという事実には不信感がますますつのる。

「……あのう……私……もしかしたら……異世界ってやつからきたのかもしれないです……。」

何を言われたのか一瞬わからなかったし、反射的に返答していた。

「い……異世界だと……。」

「はい。」

「そ……そんなの信じられるか。」

「でも、だって……この大陸の名前も国の名前も、私の全く知らないものです……。」

「……か……還り方は……。」

「わかるわけじゃないですか。起きたらここにいたんですよ。」

「だよな……。」

「はい。」

「つまりお前は、ここがどこだかも、どうしてここにいてもわからないと……。」

「はい。そうなんです。」

「……はあ……もういい。頭が痛くなる。」

大臣や貴族がよこした者でも、暗殺者でもなかったのはある意味よかったが、私が思っていたよりも事態は重そうだ。

かかえていた頭をあげ、少女を観察する。

ショックを受けているかと思えば、表情はなんだかキラキラと輝い

ている。どうしたんだ？

「おい。……おい。」

「はい。」

「お前……不安ではないのか。」

「まあ……不安といえは不安ですけど、今はこの未知の体験を満喫し尽くしたいです。還る方法はおいおい考えます。」

「ほう……。」

思わず笑みがこぼれた。

こいつなかなか面白い。肝もすわっているようだし、何より先ほどから冷静さをかいていない。

ホシイ。コノ少女が手元ニホシイ。

自分の欲望をはっきりと自覚した。

「お前、名はなんという。」

「……名を聞くなり自分から名のる。これはどこの世界でも常識だと思っていましたが……。」

ツチ、生意気な奴だ。この私にそんなことをいう奴は珍しい。

「……バッシュ・レオン・ハルベルト」セーラだ。だいたい分かっているとは思うが、この国の王だ。年は24になる。」

「小町勇姫<sup>こまちゆうめ</sup>16歳。女子高生やってます。勇姫って読んでください。」

「

もつと若いと思っていたが、16。なるほど、それならうなずけるスタイルだ。

それより、さつきから思っていたが、こいつの言葉には時々わからない単語が入る。

「……女子高生と言うのはなんだ。」

「高等教育を受けている女子のことを、私の国ではそう呼ぶのですよ。おじさんたちの注目の的です。」

……なぜ高等教育を受けている女子が、オヤジの注目の的になるのか理解できない。

ただ一つ言えることは

「……なんだか気持ち悪いな……。」

「仕方ありません。おじさんたちも日ごろのストレスがあるのですよ。」

「……そうか。……そろそろ話を戻してもいいか。」

こいつを私の手元からめとるための、話をしなくてはいけない。

「はい。どうぞ。」

「お前……いや、勇姫。この世界に興味があるといっていたな。しばらくこの世界に滞在するつもりであろう。」

「はい。」

「ならばここに住むとよい。」

ずっとな、と心の中で付け加える。

「ここって、この部屋のことですか。」

「いや、この城のことだ。別にこの部屋でも構わないが……。まだ婚礼の儀をしてないしな。」

「最後の方聞き取れませんでした。なんですか。」

「なんでもない。関係のないことだ。」

本音が漏れていたようだ。あぶない、あぶない。

「そうですか……。でも、いいのですか。私を住ませても。」

むしろ住んでもらわなければ困る。外に出したら最後、どこかにいつてしまいそうだからな。

部屋は……隣の王妃の間が空いているな。隠し通路もあるし、おいおいこいつの部屋になるものだ。まあいいだろう。

「構わん。部屋は余っている。私の隣の部屋を用意させよう。それに教師もつけてやる。」

「教師？」

「この国の読み書や常識を知っておいた方よいであろう。話は通じるようだから問題ないな。」

最低限の王妃としての仕事ができないと困るしな。

「わー、ありがとうございます王様。」

愛らしい笑顔でお礼を言われたが、物足りない。

「いや、せいぜい励めよ。それと私のことは王様ではなく、バツシユと呼んでくれ。それと敬語も無しだ。」

「はい。あ、間違えた。うん。本当にありがとうございますバツシユ。」

うむ、こっちの方がしっくりくるな。

こいつをからめ取るには、いろいろと下準備をしなければいけない



な。これから忙しくなる。

でもまあ、手始めに、私好みのドレスを着せるところからはじめるか。

## 異世界の生活

とある午後の昼下がり

一般サラリーマン家庭の三兄妹の末っ子として生まれた私には、豪華すぎるほどのアフタヌーンティーのセットを目の前に考えるのは……今置かれている現状である。

この世界に来て早3週間という月日が過ぎた。

バツシユの気遣いのかいあってか、生活はとても快適だ。

食事のほとんどが、日本で言う洋食のような感じで、とってもおいしい。

さすがお城って感じたが、ときどき見た瞬間に食欲をなくすような青や、紫の物がでる。

口に入れてみればたいへんおいしいのだが、入れるまでの勇気が図り知れない。

服はお城だからなのかドレスが基本。

現代の女子高生には少し動きにくいえに、コルセットは少し苦しい……。

あとなんでか知らないけど、胸の露出が激しい気がする。こつゆうのが流行りなのか……。

勉強はやっぱり難しい……。

文字は、言葉が通じるからもしかして……と思っていたら読めたのでラッキーだったが、書きはビミョー。

しかし、問題はこれだけではなかった。

礼儀作法は身体動かすことだからまだいいとして、歴史。これが問題だった。

貴族同士のバックグラウンドも絡めて、話されるからわけがわからない。

私、歴史とかやりたくないから理系クラスに進んだのにな……。

あと、お風呂。これはなかなか曲者だった。

この国の主流は蒸し風呂で、あかすり？みたいな奴だった。

気持ちいいんだけど……なんか物足りない。湯船が恋しい。

このことをバツシュに話したら、なんとかしてくれるって言うてたから、もう少しの我慢。

バツシュから私のお世話係に侍女と護衛が付けられた。

侍女はラナン、ナージャ、イルミナの3人。3人ともすごく美人で可愛い。護衛はターナとラシエル2人、こちらも頼りになる姉御肌の美人さんだ。綺麗なモノ好きの私としては、バツシュも含めて、いい目の保養になっている。

侍女も護衛もいらないうって言ったんだけど、客人をもてなさない国だと思われると困るって、押し切られた。

百歩譲って、侍女はわかる。恥ずかしいけど、お風呂とか、着替えとか慣れないし、一人ではできないから。

でもなんで護衛……。バツシュは危ないからだって言ってたけど、なんで危ないんだろう……。

聞いた話によると、女性の騎士は少なくてすごく貴重らしいのに……。

しかも、危ないからって、この世界に来てから3週間、バツシュ抜きで一度も部屋から出してもらってない。

こんなんじゃ、私の本来の目的が果たせないよ。

城下の街だっ て見てみたい。

せめて、ストレス解消に好きな時に庭に出るのぐらい許してほしい。

「はあ……」

思わずため息がこぼれた。

「どうかなさいましたか。勇姫様。」

近くにいた侍女のラナンが反応した。

「うん。だっ て暇なんだもん。部屋の中ばかりなのはストレスたまるよ……」

「申し訳ございません。陛下からお部屋から出さないように言われておりますので……」

「……うん。それはわかってるよ。無理矢理部屋から出て、ラナン達が怒られるのは困るしね。」

「勇姫様……」

ラナンにすぐ心配をかけてしまったみたいだ。

しかし……不謹慎かもしれないが、美人の憂い顔はなんて絵になるんだろう……

カメラ欲しい。写真撮りたい。

「さま。きさま。勇姫様。」

「は、はい。」

ずいぶん前から呼ばれていたようだ。どうも美人に見とれすぎていたらしい。

「大丈夫ですか？勇姫様。どこか御加減でも悪いのではないですか？」

「う、ううん。平気だよ。」

「なら、よろしいのですが。」

「本当に大丈夫だって。ところで、呼んでたでしょう？なあに？」

「はい。お暇だとおっしゃられた件ですが……陛下に申してみてもどうでしょう？勇姫様のためであればお時間を作っていただけたと思いますし、最低限お庭ぐらいの許可はいただけたと思います。」

「そうかなあ。」

「ええ、陛下は勇姫様からのお願いは断れないですから。」

「ううん。じゃあ、夕食のときにでも頼んでみようかな。」

「それがよろしいかと思います。ところで、勇姫様。」

「ん。なあに。」

「今朝も夜着を着ていらつしやいませんでしたね。」

「……だって、裸の方が気持ちいいんだもん……。」

「……勇姫様……お願いですから夜着をまとうてお休みください。獣を刺激し、要らぬ火の粉を被るようになりますよ。」

「……それは、どういう意味？」

「いいえ、なんでもございませ……。」

そのまま、火の粉発言は流されてしまった。

しかし、私は、この発言を深く追求しなかったことをのちに後悔することになる。

気付かなかったのだ、侍女たちが、護衛の騎士までもが執拗に私に夜着を着せようとしている理由を。

知らなかったのだ、バッシュが秘密の通路を通って夜中にこの部屋

にかよっていることを。

侍女や護衛たちは、こんなにも私を守ろうとしてくれていたのに。

## 異世界の王宮事情

夜も更け、深夜とも言つべき時間、国王の寝室から隠し通路を通じて、王妃間の寝室へと入る。

物音をたてぬように慎重にベッドへと、近づく。

ベッドの近くには、ベッドの主が脱いだであろう夜着が落ちている。

ギシ

ベッドのふちに腰をかけ、ベッドの主である少女の頬に触れる。

「勇姫……。」

名を呼び、起きないことを確認する。

「……うう……ん……。」

唸るのはいつものこと、安心して触れることにする。

顔にかかる髪を梳き、額、瞼、頬、唇、首筋、胸、足、順を追って触れるだけの口付けをする。

最後に、愛らしい唇に深い口付けをする。

ぴちゃ、くちや

「ううん……ん……。」

苦しいのだろうか、勇姫が鼻にかかった卑猥な唸り声を上げ、顔をそむけようとする。

だが、まだ、逃がす気はない。  
顔を固定し、より深く口付けていく。

くちゃあ、ぴちゃ

「んん…… あはあ…… つうん……。」

時間にして、およそ5分くらいだろうか、唇を離す。

口付けの後の腫れぼったい唇に、名残惜しさを感じながらも、これ以上やると止まらなくなるので、王妃の間の寝室を後にする。

これが最近の私、バツシュ・レオン・ハルベルトⅡセーラの日課である。

本音を言えば、もつとしたいし、あの美しい身体を味わいたい。

しかし、勇姫はセーラ国の女子の成人年齢である17歳をまだ迎えておらず、国王たる私でも、国の法律を破れば処罰が下る。

それに、婚前交渉などして、勇姫が貴族の馬鹿どもに、身持ちの悪い女だと言われるのは我慢ならない。

そしてなにより、勇姫の心がまだ私に向いていない。

まあ、これについては、おいおい向かせていくし、妹思いの兄たちのおかげで、恋人や思い人がいなかったことも調査済みなので、問題ない。

勇姫の異世界生活は、ほとんど問題なく行えているようだ。

ただ、やはり異世界、生活の仕方が違うらしく、時々微妙な顔をしている。それもまた、愛らしい。

我慢できないときは、かわいらしい『お願い』をしてくれる。これは、鼻血ものだ。

『わがままは言っちゃいけないけど……でも、どうしても……。』  
という感じがありありと伝わってくる。



今夜の夕食の時も『庭の散歩がしたい』というお願いに、即効許可をだした。

ただし、侍女や護衛がいようと、私の目の届かないところに勇姫がいくのはいやなので、毎日、午後のひと時を勇姫と散歩することに決めた。

城下にもいきたいようなので、最低でも半月に一度は勇姫と城下に出かけることも決めた。

また、風呂の件だが、勇姫の世界では、湯船に湯をためて入るが一般的だったようだ。そういう風呂が城の中にないわけではないが、他国からの来賓用が主であり、個人用ではなく、多人数向けである。勇姫の肌を誰かれ構わず見せる気にはならないので、王妃の隣の隣の部屋を急遽改装中である。

将来的に、いっしょに入るのがたのしみである。

たのしみはこれだけではない。

勇姫のドレス姿、これまた鼻血物である。

勇姫に着させているドレスは、勇姫より少し年齢が上の、この国の結婚適齢期といわれる年代、18から20歳の女子が好んで着るデザインのを着させている。

あの幼い顔と、顔に似合わないスタイルとがいまって、背徳的でたまらない。

まあ、常にドレスでいる必要はないのだが、着る習慣がなかったよ  
うなので、慣れてもらうためにも着させている。

勇姫の生活が滞りなく行えているのも、私のたのしみが満たされているのも、勇姫に付けた侍女や、護衛が優秀なおかげであるが、い  
かんせん、奴らの視線が痛い。

主である私に向ける視線ではない。しかし、勇姫を思つてのことだ  
と思うと何とも言えない。それに、あの視線がなければ、間違いを  
起こしていたかもしれないことは、一度や二度ではない。

だがしかし、勇姫に夜着を着せて寝かそうとするのはやめてほしい。  
勇姫の美しい四肢を眺め、時々は口付け、将来についての想像をめ  
ぐらす。それこそが、満たされる欲望を持った私の、毎夜、一番の  
たのしみなのだ、奪われてしまったらたまつたものではない。欲望  
が爆発し、勇姫に襲い掛かる。これは、まず、間違いない。

だからこそ、欲望が爆発しないうちに、勇姫が17になった折には、  
すぐにでも婚礼の儀を行いたいと思っている。  
でなければ、法律を犯すことになる。それは、一国の主としてはあ  
まりにも情けない。

セーラ国では、王の正妻である王妃にはある程度身分が必要になる。  
貴族であれば、侯爵以上の家の出であることが望ましい。側妃や愛  
妾となると、あまり身分は関係ないのだが、勇姫以外を妻にするつ  
もりはない。

しかし、勇姫は異世界出身。この国での身分など無いに等しい。と  
なると、ある程度の貴族に養子に出すことが望ましい。  
侯爵以上で、政治的な力もあり、王に齒向かわず、勇姫の力となつ  
てくれる存在……。

思わず顔に笑みが浮かんだ。

「セルドル公爵家に養子として迎えてもらおう。」「

私の欲望を秘めた声が、深夜、一人きりの寝室に響いた。

## 異世界の家族

「……て……ださい。……おきて……さい。起きてください。勇姫様」

「……うん。あと……10分。」

「ダメです。今日はお客様がお見えです。」

「……お客様……。」

「おはようございます、勇姫様。今日も裸で寝ていらっしやいましたね。今日はお客様が見えていらっしやいますよ。ご朝食はお客様といっしょにとっていただきます。」

「おはよう、イルミナ。裸で寝てたのは……クセだからゆる……ご……ごめんなさい。」

イルミナに睨まれた……。美人の怒った顔はめっちゃくちや迫力がある。思わず謝ってしまった。本当に裸で寝るのやめようかな……。

「いいえ。反省してください。たならいいんですよ。毎日同じことを言っている気がしますけどね。」

「本当にごめんなさい。……と……ところでお客さまって、誰なの。私この世界に知ってる人少ないよ。」

「お客様とは、セルドル公爵と公爵夫人ですわ。詳しい説明は同席なさる陛下の方からあると思いますので、私からはひかえさせていただきます。」

「セルドル公爵と夫人……。セルドル公爵家……歴史の授業でやったような……。うーん、何代か前の王弟で、バッシュのお母さんがセルドル公爵家の出だったような……。」

「素晴らしい記憶力ですわ。さすが勇姫様ですね。」

「えへへ、これでも学校の成績は良かったんだよ、学年5位。」

「まあ、本当に素晴らしいですわ。ですが、裸で言われても説得力に少々かけますね……。」

「うつ……。そうだね。」

「さあ勇姫様、お客様をこれ以上お待たせするわけにはまいりませ  
んの、お早く準備をしましょう。」

「うん。」

知らない人に会ったのしみだな。この世界のこといろいろ教えて  
くれるかな。

\*\*\*

身支度を済ませ、お客様が待っているという部屋にイルミナとラシ  
エルと向かう途中でバツシュにあった。

「あ、おはよう、バツシュ。」

「うむ、おはよう。これから、客間に向かうのだろうか？ともに行こ  
う。イルミナ、ラシエル私とともにいるから下がって構わない。」

「ですが、なにかあったら危険です。騎士としてもに行くのが私  
の仕事です。」

「下がれと言っている。」

「……はい、失礼させていただきます。」

「では陛下、失礼します。ラシエルともに行きましょう。」

むむむ、ラシエルを怒って気落ちさせるなんて、バツシュはどうい  
うつもりなんだ。美人は意気消沈しても美人だけど、私はかわいく  
てきれいな女の人の味方だぞ。

「うむ、いったな。さあ、勇姫行こうか。ん……。どうしたんだ勇姫  
？」

「むー、女の子にあんなに怒るなんて、バツシュはどういうつもり  
なの。」

「あれは、国王である私の命令を無視したんだから、仕方あるまい。」  
「でも、あれは王様であるバツシュのことを心配して言ってたんだよ。あんな言い方しなくてもいいじゃない。ラシエルはがんばってるもん。またこんなことがあったら、バツシュのこと嫌いになるからね。」

ああ、すごい子供っぽい。

バツシュが言っていることが、この国では正当だってわかるけど……でも、やっぱり、こんなに良くしてくれているバツシュが、傲慢な王様になってほしくないもん。  
うーん、一宿一飯の恩義？友情？母性？とにかくバツシュには、このままいい王様でいてほしい。

「すまなかった、勇姫。今度から気を付ける。後でラシエルにも言っておこう。……だから、嫌いになるだなんていうな。」

なんでバツシュは、嫌いになるくらいでこんなにあせっているんだろ？

「ううん。わかってくれたならいいよ。嫌いになるなんて言ってくれんね。お客様が待っているんでしょう？早く行こう。」

「ああ、わかったよ。私が悪かったこともちゃんとな。そうだな、これ以上客を待たせるわけにもいかないから行くか。」

「うん」

\*\*\*

コンコン、ギー

「入るぞ、セルドル公爵。公爵も夫人もよく来てくれたな。」

「陛下が呼びとあらば、私も妻も喜んで参りますよ、かわいい甥っ子のために。それに、今日はかわいい娘にもあえることですし。」

「……むすめ？ ねえ、**バッシ**ュどういふこと。」

「ああ、勇姫紹介する。セルドル公爵とご婦人だ。そして今日からお前の両親になる。」

「初めまして、勇姫ちゃん。ラドクリフ・フォン・セルドルだよ。今日から君のパパになるんだ。こっちは妻のサーシャ・モルト・セルドルでママだよ。パパ、ママって呼んでね。」

「よろしくね、勇姫ちゃん。それにしても、こんなにかわいい娘で、私、うれしいわ。」

か……会話についていけない……。パパ？ママ？両親？どういうこと？

確かに、こんなロマンスグレーの茶髪にエメラルドグリーンの瞳のダンディーなおじ様がパパならうれしいし、こんなふわっふわのライトブラウンの髪に、ブルーの瞳の巨乳美少女がママなら自慢できる。

だかしかし、どういうことだ――

「……バッシュ、どういふこと……。」

「……く……詳しい話は朝食を食べながらにしよう。」

\*  
\*  
\*

力チャ力チャ

朝食をとりながら事情を聴いた。要約すると、こういうことらしい。

この世界には私の戸籍がない。戸籍を作るために、どこかの養子に入れる必要があった。

どうせ養子に入れるなら、身分がある家がいいだろうということでバツシュのおじさんにあたる公爵に声をかけたらいい返事が返ってきた、ということらしい。

それでもって今日は顔合わせと、養子縁組みの書類にサインをするらしい。

「私たち娘がほしかったの。でも、主人との間には息子しか生まれなくて……。3人も作ったのに全部息子。」

「かわいくもなんともないわ。でも、陛下に声をかけていただけでも二もなく返事をしたわ。」

「はあ……。」

「これからよろしくね、勇姫ちゃん。」

「はあ……。よろしく願います。ところで、サーシャさんはお幾つなんですか。」

「ママって呼んで。」

「あ……サー。」

「ママ。」

「……ママはお幾つなんですか。」

「主人と同年よ。42歳。」

「よんじゅーに……。」

こ、こんなに若い42がいるのか……!?少女にしか見えん。

「あー、サーシャだけママって、呼んでもらってずるいぞ。勇姫ちゃん、私のこともパパって呼んで。」

期待のこもった目……。あきらめるしか道はない。本当の両親ですら父さん、母さんと呼んでいたのに……。

「……パパ……。」

ガバ

パパに抱きしめられた。

「もう、勇姫ちゃん超かわいい。こんな娘ができて本当にうれしいよ。」

「まあ、パパずるいわ。私も仲間に入れてくださいな。」

ギユ

ママも参加。

ロマンスグレーと年齢不詳美少女、一般人の人間サンドウィッチ完成。

うわー、ママの巨乳が当たるよ。パパからはいい匂いするしサイコ！。

「仲良くなるのは結構だが、勇姫を返してもらおう。」

「なんで？両親ができたってことは、私、お城を出て、セルドル公爵家のお家に行くんじゃないの？」

「勇姫を外に出すわけないだろう。それにこの世界での勇姫の家はここだ。」

ちえっ、セルドル公爵家のほうが自由に異世界ツワーできるかと思っただのに……。まあ、バツシュの近くのほうが安心かな。

「勇姫ちゃん。陛下がケチだから一緒に生活はできないけど、今度家にもおいで、部屋も用意してあるから。ここだけの話、家出して



きてもいいんだぞ。」

「そうよ、勇姫ちゃん。絶対にいらっしやいね。そのとき息子たちを紹介するわ。」

「家出なんてさせるかー。」

騒動の中、異世界文字で読めるけど、読みにくい書類の言われたところ、に3枚サインした。

その中の1枚だけ重要なものなのか、正式名でサインといわれ、漢字と異世界文字のごちゃ混ぜでサインした。

小町勇姫、16歳。異世界で家族ができて、勇姫・小町・セルドルになりました。

両親はなんだかつかめませんが、面白そうな感じがします。義兄たち、に会うのも楽しみです。

言われた通りにサインしたから知らなかった。これが、婚姻のための養子縁組みだなんて……。ごちゃ混ぜサインの書類が婚姻届けだなんて……。私は知らなかった。

## 異世界の家族（後書き）

続くと思う。

## 異世界の罾（前書き）

家族のバツシュ視点です。

## 異世界の罾

今朝は、セルドル公爵である我が叔父と夫人が、養子縁組みの話で、朝食をとにもすることになっている。

勇姫も同席させるつもりなので、今は勇姫の待伏せ中だ。

コツコツ

勇姫の部屋の方角から足音が聞こえた。

待伏せをしていたのではなく、今来た感じを装いながら、勇姫が到着するのを待った。

「あ、おはよう、バツシュ。」

今日も勇姫はかわいい。昨夜ももちろんかわいかったが、ドレスを着ていると、逆に中身を想像させる。なんとも言えない色香がある。

「うむ、おはよう。これから、客間に向かうのだろうか？ともに行こう。イルミナ、ラシエル私とともにいるから下がって構わない。」

せつかくの二人っきりの時間、邪魔はいらん。城の警備は完璧と言つてよいし、勇姫は私を守る。

「ですが、なにかあったら危険です。騎士としてともに行くのが私の仕事です。」

ラシエルの目線が痛い。私のことを危険視しているな。

確かに勇姫はとてつもなくかわいいが、犯罪者になる気はないし、今朝は勇姫を娶るために重要な日であるといえる。我慢できる。

そういう意味合いを込めて、ラシエルに視線をくれてやった。

「下がれと言っている。」

「……はい、失礼させていただきます。」

「では陛下、失礼します。ラシエルともに行きましょう。」

二人とも理解してくれたようだ。我が城に努めるものは優秀だ。

「うむ、いったな。さあ、勇姫行こうか。ん……どうしたんだ勇姫？」

勇姫に視線を向けると、なんだか不機嫌であるようだ。そんな姿もかわいく見えるから、私もどうかしている。

「むー、女の子にあんなに怒るなんて、バツシュはどういうつもりなの。」

どうやら先ほどのことで、「ご機嫌がななめらしい。」

「あれは、国王である私の命令を無視したんだから、仕方あるまい。」

「でも、あれは王様であるバツシュのことを心配して言っただけだよ。あんな言い方しなくてもいいじゃない。ラシエルはがんばってるもん。またこんなことがあったら、バツシュのこと嫌いになるからね。」

き……嫌いになるだー……！！！！

間違ってもそんなことはさせせん。

それに先ほどの、私を心配したのではなく、主であるお前を心配していたんだ。

うむ、それを考えると、先ほどのラシエルの行動は騎士として褒められるものであろう。

「すまなかった、勇姫。今度から気を付ける。後でラシエルにも言っておこう。……だから、嫌いになるだなんていうな。」

勇姫に嫌われたら生きていけない。勇姫以外娶る気もないから、後継ぎがいなくなって国も亡びる。

「ううん。わかってくれたならいいよ。嫌いになるなんて言っていないね。お客様が待っているんでしょう？早く行こう。」

勇姫はなんて優しいんだ。人をすぐに許すことができる素直さ、周囲に気を使うこともできる。

私の伴侶は本当に素晴らしい。

「ああ、わかったよ。私が悪かったこともちゃんとな。そうだな、これ以上客を待たせるわけにもいかないから行くか。」

「うん」

\*\*\*

コンコン、ギー

「入るぞ、セルドル公爵。公爵も夫人もよく来てくれたな。」

「陛下がお呼びとあらば、私も妻も喜んで参りますよ、かわいい甥っ子のために。それに、今日はかわいい娘にもあえることですし。」

食えぬことをいう。

叔父は政敵にはならないが、決して味方にもならない。

今回は、夫人たつての希望と、自分の欲望を叶えたのであろう。愛妻家というのは周知の事実であるから。

「……むすめ？ねえ、バッシュどういうこと。」

そういえば、勇姫にはまだ何も話していなかったな。

「ああ、勇姫紹介する。セルドル公爵とご婦人だ。そして今日からお前の両親になる。」

「初めまして、勇姫ちゃん。ラドクリフ・フォン・セルドルだよ。今日から君のパパになるんだ。こっちは妻のサーシャ・モルト・セルドルでママだよ。パパ、ママって呼んでね。」

……このおっさん……本当に何考えてんだ……。

「よろしくね、勇姫ちゃん。それにしても、こんなにかわいい娘で私、うれしいわ。」

夫人も笑顔で、何を考えているかつかめないが、娘の誕生を喜んでいるのだと思う……。

ところで、勇姫が何の反応も示さないがどうしたのだろう。

「……………バッシュ、どういうこと……………」

……………言葉の端々にとげがある……………。先ほどの可愛らしいご機嫌斜めと違い、勇姫の背後からなんだか黒いものが……………。

「……………詳しい話は朝食を食べながらにしよう。」

\*\*\*

「　　というわけだ。」

「わかった。要は私がセルドル公爵家に養子に入ること、戸籍を作るってことね。」

「そういうことだ。勝手に決めて悪かったな。」

「私のことを思ってたことでしょう。ありがとね、バツシュ。」

そのありがとうの笑顔に多少の、罪悪感を覚える。

勇姫を娶るための養子縁組みでだが、幸せにすると、心の中で誓う。

「この3枚の書類にサインしてくれるか？特にこの1枚は正式な名前で頼む。」

「正式な名前？」

「勇姫の名前は、勇姫の国の言葉で書いてほしいんだ。」

「漢字ってこと？」

「カンジがなんだかはわからんが、正式な文字がそうならそれだ。」  
「ん、わかった。」

正式なサインが必要な書類はこの国では、婚姻届だけだ。養子縁組みの書類に混ぜて出したので、勇姫は疑っていないようだ。

勇姫がサインしようとしたその時、公爵夫人が声をかけてきた。

「私たち娘がほしかったの。でも、主人との間には息子しか生まれなくて……。3人も作ったのに全部息子。かわいくもなんともないわ。でも、陛下に声をかけていただけて一も二もなく返事をしたわ。」

「はあ……。」

「これからよろしくね、勇姫ちゃん。」

「はあ……よろしく願います。ところで、サーシャさんはお幾つなんでしょうか。」



「ママって呼んで。」

「あの……サー」

「ママ」

「……ママはお幾つなんですか。」

「主人と同じ年よ。42歳。」

「よんじゅーに……。」

言いたいことはわかるぞ……私もこの人が信じられないからな……。

「あー、サーシャだけママって、呼んでもらってずるいぞ。勇姬ちゃん、私のこともパパって呼んで。」

本当にこの人は何を考えているんだ。

そんな目で見たら勇姬が、断れるはずないだろう。

「……パパ……。」

ガバ

勇姬がセルドル公爵の希望をかなえた瞬間、あることがおっさんは抱きついていた。

「もう、勇姬ちゃん超かわいい。こんな娘ができて本当にうれしいよ。」

「まあ、パパずるいわ。私も仲間に入れてくださいな。」

あまりのことに思考が停止している間に、夫人も参戦。人間サンドの完成だ。

私の勇姬に何をしてくれる。

「仲良くなるのは結構だが、勇姫を返してもらおう。」

私だって、起きてる勇姫を抱きしめたことはまだないんだ。そんなうらやましいこと、他人にさせてたまるか。

「なんで？両親ができたってことは、私、お城を出て、セルドル公爵家のお家に行くんじゃないの？」

勇姫が恐ろしいことを言う。そんなことさせるわけがないだろう。

「勇姫を外に出すわけないだろう。それにこの世界での勇姫の家はここだ。」

勇姫の家はこの先ずつとここだ。

「勇姫ちゃん。陛下がケチだから一緒に生活はできないけど、今度家にもおいで、部屋も用意してあるから。ここだけの話、家出してきたもいいんだぞ。」

「そうよ、勇姫ちゃん。絶対にいらつしゃいね。そのとき息子たちを紹介するわ。」

息子を紹介するだど！！！私のいないところで、勇姫に男が近づくなんて許さん。

「家出なんてさせるかー。」

私が騒いでいる間に、勇姫は書類を完成させていた。

養子縁組みの書類は、戸籍を管轄している役所に出すとして、婚姻届は、勇姫の１７歳の誕生日まで私が大切に保管することに決めた

o

## 異世界の罾（後書き）

セルドル公爵の趣味は、甥っ子であるバツシュをいじることだと思  
う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7967v/>

---

異世界の

2011年8月15日07時16分発行